

鳥飼玖美子 著

『通訳者と戦後日米外交』

(みすず書房、2007年、A5版、382頁、3800円＋税)

吉田理加

本書は、立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科で教鞭をとる鳥飼玖美子教授によって執筆されたものである。鳥飼氏は、日本でいまだ学問分野として一般に認知されていなかった「通訳についての学問」の構築に力を注ぎ、「通訳」という職業の専門化に欠かせない通訳翻訳理論研究を推進している第一人者でもある。

本書は、著者が2006年11月、英国サウサンプトン大学へ提出した博士論文（Diplomatic Interpreters in Post-World War II Japan: Voices of the Invisible Presence in Foreign Relations）を日本の読者向けに書き改めたものであるが、執筆の背景には、「声は聞こえるが姿は見せないもの」として通常理解され、自らの「声」さえも発することが不可能な状態におかれることもある「通訳」という職に対して、同時通訳者であった著者が葛藤を抱き、「自分の歌を唄う」ために、通訳研究の道に進んだという著者自身の人生の歩みが重要な動機として存在している。

本書では、「オーラル・ヒストリー」という手法が用いられ、日本の同時通訳のパイオニア5名（西山千、相馬雪香、村松増美、國弘正雄、小松達也）の「声なき声」を通して、著者自身が自問自答してきた「通訳者の役割」について、ブルデューやゴフマンなどの社会学的知見に依拠した考察・分析がなされている。これまで「歴史の外に横たわる顔なき顔、声なき声」という存在であり、いわば、歴史における「マイノリティ」、「周縁者」であったといえる通訳者に光を当て、戦後日本の外交史に通訳者の存在を組み込み、外交折衝における言語の果たす重要性を示したことにより「戦後史の範囲を広げる」という偉業を成し遂げているといえるだろう。同時に、本書はオーラル・ヒストリーという手法を通訳研究に接合した、世界でも初の研究書である。日本国内のみならず海外においても通訳研究の歴史は比較的浅いが、従来の伝統的な通訳研究は同時通訳者の通訳プロセスの解明などに焦点をあてた認知心理学的アプローチが主流であった。しかし近年、外国人、あるいは移民として暮らす人びとが世界的に増加するにつれ、「コミュニティ通訳」という新たな通訳形態の需要が増しており、そうした背景から、研究方法にも社会学、社会言語学、語用論、言語人類学等の学際的アプローチがとり入れられ始めている。しかし、いまだ、通訳者を生身の人間として特殊な社会・文化・歴史的コンテクストに位置づけてとらえた研究は限定的である。その意味において、本書は、通訳翻訳研究の新たな学術的方途を模索するきわめて先駆的な研究であると同時に、読者に通訳者の役割に関して社会・歴史学的な関心を喚

起させる日本語で書かれた初の本格的な通訳研究書であるといえるだろう。

本書は、前半（第1章～第3章）の理論・背景説明と後半（第4章～終章）の同時通訳パイオニア5名の語りと考察に大きく分かれる。

前半の第1章「はじめに」では、本書の目的、研究の背景、研究手法と調査対象者等について説明されている。本書で用いられたオーラル・ヒストリーという手法は、個人の経験から社会や文化の諸相を読み解こうとするものであり、「個人の歴史」に関する「語り」をもとにするアプローチ（トンプソン、2002）で、インタビューによって収集された口述資料がその出発点となる。著者も指摘しているとおり、オーラル・ヒストリーという手法に対しては、インタビューで語られた「個人の語り」は客観性、信用性等が欠如しているという批判があり、学術資料として扱うことを疑問視する風潮がある。しかし、本書の後半に掲載された通訳パイオニアの語りを読めばわかるように、戦後日本の通訳界を代表する5名の「個人の語り」は、「あの時、あそこ」での過去の経験や出来事を「いま、ここ」でダイナミックに再現し、過去の「歴史」に対峙する。換言すれば、権力者側の視点から書記言語で記述されている「歴史」に対して、「見えない存在」とされてきた通訳者の視点によって「いま、ここ」で歴史が口頭言語で書き換えられる効果があるのである。つまり、オーラル・ヒストリーの特徴は、「客観的な真実」を追究することにあるのではなく、過去の出来事（歴史）と「いま、ここ」でなされる個人の「体験」の再現という「真実」とが絡み合い、従来の「歴史」の空白を埋めたり、異なる視点を提供したりして、歴史をより多層的で複眼的なものにすることにある。本書はこの手法を用いることにより、見事に通訳史の空白を埋め、通訳研究における新たな学術的方向性を示しているといえる。

第2章「これまでの通訳と翻訳に関する研究」では、翻訳と通訳の類似点と相違点が言及され、これまでの翻訳通訳研究が概観されており、読者は、通訳翻訳研究の動向と重要概念にふれることができる。第3章「日本における通訳と翻訳」では、日本における通訳と翻訳の歴史が、言語観、通訳養成、通訳教育、これからの通訳の展望などとあわせて説明されている。今まで、日本語で通訳翻訳研究領域の重要な先行研究を網羅的に紹介したものはほとんど見あたらないため、これから通訳翻訳研究の道に進む者にとって、貴重な概説となるであろう。

後半の第4章「通訳者の〈ハビトゥス〉」では、どのようにして英語を習得したのか、育った環境、そして第2次大戦との関わりについて、同時通訳パイオニアの語りが紹介されており、ブルデューのいうところの「ハビトゥス」を知ることにより、通訳者をひとりの人間として理解することに成功している。それは、戦後という同時代を生きた通訳者たちが「声」を出すことにより、それぞれに異なる個性豊かな「顔」があらわれてきていることに示されている。同時通訳者といえば、「バイリンガル」と思われがちであるが、現実には5名の同時通訳パイオニアのうち、幼少時からいわゆるバイリンガル環境で育ったのは、西山と相馬だけであり、國弘、村松、小松は英語を外国語として学び、習得したことが語られている。村松と國弘が初めて英語で会話した相手は捕虜であったという。國弘は当時中学生であったというが、学んでいる英語がじっさいに通じるものかどうか試したく、自らの意思で捕虜収容所に出かけて行き、捕虜に話しかけ、捕虜の返答が理解できたときの「通じた」という喜びの体験をいきいきと語っている。また、小松は大学生になるまで英語で会話をした経験がなかったと言っている。このように、5人の「ハビトゥス」はさまざまであったが、同時通訳パイオニア5名に共通の資質として、「旺盛な知的好奇心で物事に取り組み、関心をもった対象には強い信念と行動力で向かうという積極性」が見出されている。

第5章「通訳という〈フィールド〉へ」では、それぞれのパイオニア同時通訳者がどのよう

にして、通訳という「フィールド」へ入っていったのか、最初の通訳の仕事の体験や通訳職についての認識についての語りが収録されている。相馬は、通訳は「使命（天命）」、西山は「技術であると同時に一種の芸術」として、2種類の「術（art）」を兼ね「通訳術」と呼んでいる。村松は「技術」、小松は「腕、技術」としながらも「職業」ととらえており、國弘は「専門職」ということばを使っている。著者は、このように戦後というまだ本格的な通訳教育が存在しなかった時期において、すでに、パイオニア5名が通訳職について明確な認識をもっており、通訳を高度な専門職として確立させるために、パイオニアたち自身が大きな貢献をしたことも指摘している。

第6章「〈実践〉としての通訳」では、Goffman (1981) の参与フレームワークを用い、「実践」の場において通訳者は音声のみを発する「発声体 (animator)」なのか、ことばを選択してじっさいに発話をつくりあげ、表現する「作者 (author)」なのか、それとも、発せられたことばに責任をもつ「本人 (principal)」なのかを機軸に、5名のパイオニアが通訳実践にどのような意識で取り組んでいたのかに焦点をあてている。西山と小松は「発声体」としての機能を重視し、村松は「発声体」に徹する意識をもちながらも「作者」として機能していることが「不沈空母」の訳語選択に示された。相馬も「発声体」を重視しつつも、聞き手の理解を心がける点で「作者」としても機能している。そして、「本人」の役割まで果たしたのは國弘のみである。鳥飼の詳細な分析によって、このように通訳者の役割が異なるのは、通訳者それぞれの個性や意識差のみに起因するのではなく、通訳者が通訳現場のコンテキストや状況を判断し、柔軟に対応しようとしているからであることが示された。つまり、通訳とは、「社会的な真空空間」でなされるものではなく、社会におけるさまざまなコンテキストにおいてなされる社会的営為であり、その役割も動的に変貌する多層的な特徴をもつことが明らかにされた。「通訳」という職責を全うするためには、規範に従従するのではなく、臨機応変にフッティングをシフトさせることが必要であることが学術的に示されたことは、今後の通訳研究のみならず、現場の通訳者や通訳教育機関にとっても、大きなパラダイムシフトをもたらすであろう。

第7章「考察—通訳の役割をめぐる—」では、通訳の役割について、「声」と「文字」、「通訳と文化的要素」、「異文化能力」などの理論を用いたより深い考察がなされている。Angelelli (2004) の「通訳者の役割と可視性に関する意識調査結果」を紹介しつつ、5名の同時通訳パイオニアと対照させ、分析・考察を行い、同時通訳パイオニアの役割意識が単純なものではなく、その場の自主的な判断でポジショニングが決まる動的なものであることを再確認している。

終章「今後の課題」では、本書で明らかになったように、通訳者の役割とは「黒衣」や「透明人間」を超えた存在であることを前提に、社会で通訳者の役割が認知されるためには、コミュニケーションの専門家として「何ができるか」を明確にしていくことが必要であると述べている。

以上、駆け足で、本書の意義を紹介してきたが、ぜひ、手にとって多くの方にじっくり読んでいただきたい。本書がもつ美徳のうち、もっとも感銘を与えるのは、おそらく、著者が長年抱き続けている「通訳」という職、通訳者に対する深い「愛情」、そして「ことば・コミュニケーション・文化」を、つねに自己批判的な精神のもと学問として新たな地平を開拓しつつける、まさにパイオニアとしての真摯な勇気が本書の通底音として鳴り響いているところであろう。本書は「異文化コミュニケーションの最前線で活躍するすべての通訳者に捧げる」ものであるとされており、「発声体」でありつつも時には「自律的判断主体」とならざるをえないことで罪の意識を感じている、評者を含む、多くの通訳者にとって、大いなる励ましとなるであろう。

## 参考文献

- Angelelli, C. V. (2004). *Revising the interpreter's role: A study of conference, court, and medical interpreters in Canada, Mexico and the United States*. Amsterdam: John Benjamins.
- Goffman, E. (1981). *Forms of talk*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- トンプソン, P. (2002). 『記憶から歴史へ: オーラル・ヒストリーの世界』 (酒井順子・訳). 青木書店.  
[原著: Thompson, P. (2000). *The voice of the past: Oral history* (3rd ed.). Oxford: Oxford University Press].